

# 論 述

## 注 意

1. 問題は全部で8ページである。
2. 解答用紙と下書き用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に縦書きで記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙および下書き用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

問一 本文中の空欄①から⑦に入れるのに最も適切な語を、次の選択肢(ア)～(キ)から選び、記号を解答欄に記入しなさい。ただし同じものは二度使えない。解答用紙(その一)を使用

(ア) 喚起 (イ) 欠如 (ウ) 生産 (エ) 黄昏 (オ) 強さ (カ) 本然 (キ) 黎明

問二 筆者は学問の言葉としての普通語と文学の言葉としての国語の関係の変遷について論じているが、傍線部(a)「小説というものの歴史性」に関する筆者の説明を二〇〇～二五〇字で要約しなさい。解答用紙(その一)を使用

問三 傍線部(b)に「真理」には二つの種類があるとあるが、その二つの内容を本文に即して簡単に説明し、筆者の見解に対するあなたの考えを述べなさい。(八〇〇字以内)解答用紙(その二)を使用

学問とは、なるべく多くの人に向かって、自分が書いた言葉が果たして「読まれるべき言葉」であるかどうかを問い、そうすることによって、人類の叡智を蓄積していくものである。学問とは「読まれるべき言葉」の連鎖にほかならず、その本質において「普通語」でなされる必然がある。

このことは、何を意味するのか？

それは、「自分たちの言葉」で学問ができるという思いこみは、実は、長い人類の歴史を振り返れば、花火のようににはかない思いこみでしかなかったという事実である。「国語」で学問をしてあたりまえだったのは、地球のほんの限られた地域で、ほんのわずかなあいだのことではしかなかった。そして、その時代は、長い人類の歴史のなかでは、規範的であるよりも、例外的な時代であった。

均衡というものはひとたび崩れはじめると、あるとき、加速度がついて崩れるようになる。イギリス、そしてアメリカが突出した国力をもつようになると、世界勢力の均衡が目に見えて崩れはじめる。言葉というものには自動運動で永らえる力があり、フラ

ンス語もドイツ語もその後しばらくは主要な(国語)として流通し続けるが、政治的、軍事的、経済的に英語圏の勢力が一人勝ちしたことが明らかになるにつれ、英語という(国語)が一人勝ちしたのも明らかになっていく。そして、それが明らかになるにつれて、(学問)の本質——(学問)とは本来、(普遍語)で読み、(普遍語)で書くものだという(学問)の本質が、否定しがたく露呈してきたのであった。

もちろん、その事実が、英語を(国語)としないヨーロッパ人にとって、痛みを伴わなかったはずはない。「学問の言葉」が英語に移っていった痛みを象徴するできごとの一つに、カレツキというポーランド人の経済学者の悲劇がある。

経済学という学問は、もとはヨーロッパのほかの地でも盛んだったにもかかわらず、アダム・スミスが一七七六年に英語で書いた『国富論』の影響力の大きさと、それに加えて、十九世紀に入ってからイギリス、それに続くアメリカの経済力の①でもって、二十世紀初頭には、すでに英語の学問となっていた。しかしながら、人は自分が生きている時代を知るのはむずかしい。

二十世紀を迎えてすでに三分の一を過ぎた一九三三年、カレツキというポーランド生まれの経済学者が、一つの論文を発表した。たんなる論文ではない。のちに古典となるケインズの『一般理論』にある原理を先に発見したという、重要な論文である。だが、気の毒なことに、カレツキはその論文を祖国の言葉、ポーランド語で著わした。当然のことにその論文は人の目にはとまらなかつた。二年後、カレツキは同じ論文を(三大国語)のうちの一つに訳して著わすが、またまた気の毒なことに、かれが得意としたのは、フランス語であった。翌年の一九三六年、ケインズの『一般理論』が英語で出版され、経済学の流れを大きく変えることになる。それを見たカレツキは、今で言う、自分の「知的所有権」を主張しようとする。『一般理論』に先駆けること三年、自分はすでに同じ原理を発見していたという論文を発表するのである。だが、なんとカレツキは、その論文もまた性懲りもなくポーランド語で著わしたのであった。当然のこととして、その論文も、誰の目にもとまらなかつた。

カレツキの祖国ポーランドは、十六世紀には、ポーランド・リトアニア連合王国として、ヨーロッパの大国の一つであった。それが、十七世紀の途中からだんだんと栄光を失い、一七九五年にはついに地図から抹消され、以降百年以上にわたって、ロシア、オーストリア、プロシアによって分断されていたという悲劇的な歴史をもつ。国家として統一されたのは第一次世界大戦が終わっ

た一九一八年。カレツキが論文を書いた一九三三年は、まだポーランドでのナシヨナリズムの氣運が高く、みな（自分たちの言葉）で書くのを誇りとしたのであろう（ポーランドはまたすぐにナチスに占領されてしまう悲惨な運命にある）。氣の毒なカレツキは、「英語で書かなかった」學者として、のちの世に名を残すことになったのであった。

カレツキの悲劇から半世紀以上たった現在、〈普通語〉というものが、英語という形をとり、しかも今や地球全体という未曾有の大きな規模で復権したのは、もう誰の目にも明らかになった。たとえ西洋にとつての〈世界〉が西洋だけで閉ざされていたとしても、イギリス、そして、それに続いたアメリカの国力の強さで、主要な〈國語〉の三極構造は崩れざるをえなかったであろう。だが、そこにさらに決定的な要因が加わったのは、その〈世界〉が西洋だけで閉ざされていた時代が幕をおろし、植民地時代を経たあと、非西洋語圏の人間がその〈世界〉へと入ってきたからにほかならない。非西洋語圏の人間の〈世界〉への参入は、「人間」といえば「キリスト教者」を指し、〈世界〉といえは西洋を指した時代が幕をおろしたのを意味する。それは、學問がヨーロッパ中心主義的なものではありえなくなった時代の到来を意味するだけではない。非西洋語圏の人間の〈世界〉への参入は、西洋語を〈母語〉としない人間自身が學問をするようになった時代の到来をも意味するのである。

非西洋語圏の學者がヨーロッパの學者のように〈三大國語〉を読むのは、困難だが不可能ではない。だが、いったいかれらは何語で書いたらよいのか。かれらは〈自分たちの言葉〉で書いてそのまま〈読まれるべき言葉〉の連鎖に入るわけにはいかない。かれらの使った言葉を読める學者は世界に稀である。かれらが書いたものが〈三大國語〉に翻訳される可能性は非常に低い。さらに、たとえもしかかれらが書いたものが〈三大國語〉に翻訳されたとしても、非西洋語が西洋語に翻訳されたときに失われるものは大きい。西洋語を〈母語〉としない學者が〈自分たちの言葉〉で書いて、〈読まれるべき言葉〉の連鎖に入ることは、ほとんどありえないのである。かれらは、學者として、〈読まれるべき言葉〉の連鎖に入るためには、〈外の言葉〉で読むだけでなく〈外の言葉〉で書くよりほかにない。そのような學者の〈世界〉への参入は、學問とは、その本質において〈普通語〉という〈外の言葉〉でなされる必然があるという、學問の ② を、今ふたたび、白日のもとに晒すものである。

今、英語の世紀に入ってから振り返ると初めて見ることがある。

それは、小説というものの歴史性である。

ヨーロッパで〈国民文学〉としての小説が、満天に輝く星のようにきらきらと輝いたのは、まさに〈国語の祝祭〉の時代だったのであつた。それは、〈学問の言葉〉と〈文学の言葉〉とが、ともに、〈国語〉でなされていた時代である。そして、それは、〈叡智を求め人〉が真剣に〈国語〉を読み書きしていた時代であり、さらには、〈文学の言葉〉が〈学問の言葉〉を超えるものだと思われていた時代であつた。

ヨーロッパで〈文学〉(Literature)という言葉が、詩や、劇や、小説に限られてもちいられるようになったのは、十八世紀後半からである。それ以前は、〈文学〉とは書かれたもの一般を指し、〈学問〉と〈文学〉は未分化のものであつた。漢語でいう「文学」と同じである。ところが、〈国語の祝祭〉の時代に入り、まさに人々が〈国語〉で読み書きするようになるにつれ、〈学問〉と〈文学〉とが分かれていった。神学校が今の大学へと形を変え、〈学問〉が専門化し、〈学問の言葉〉がしだいに専門的な言葉となつてゆき、〈文学の言葉〉と分かれていったのである。その結果、昔は宗教書にあつた、「人間とは何か」「人はいかに生きるべきか」など、人間として問はずにはいられない問いに答えられる叡智に満ちた言葉は、専門化されていった〈学問の言葉〉には求められなくなった。人々は、その代わり、そのような叡智に満ちた言葉を、〈文学の言葉〉に求めるようになったのである。〈文学の言葉〉のなかでもことに小説に求めるようになったのである。〈文学〉という言葉が今いう〈文学〉を指すようになり、やがて小説というものがその〈文学〉を象徴するようになったとき、〈文学〉は、まさに〈学問〉を超越するものとして存在するようになった。

そして、〈国語〉という言葉こそ、小説という新しい〈文学〉のジャンルにまことにうつつけの言葉だったのである。

くり返すが、〈国語〉とは、もとは〈現地語〉でしかなかった言葉が、〈普通語〉からの翻訳を通じて、〈普通語〉と同じレベルで、美的にだけでなく、知的にも、倫理的にも、最高のものを目指す重荷を負うようになった言葉である。しかしながら、〈国語〉はそれ以上の言葉でもある。なぜなら、〈国語〉は、〈普通語〉と同じように機能しながらも、〈普通語〉とちがって、〈現地語〉のもつ長所、すなわち〈母語〉のもつ長所を、徹頭徹尾、生かし切ることができる言葉だからである。

小説は〈母語〉のもつ長所を存分に利用しながら発展していった。かたや〈普通語〉の翻訳として生まれた小説は、神の存在の有無、戦争と平和、人類の運命など雄々しく立派なことがらについて重々しく抽象的に語れる。だが、それだけではない。かたや〈母語〉を母体として生まれた小説は、人間の日常生活という、卑近な出来事の連続でしかないものを、どうでもいいような細部にわたってまで、生き生きと魅力的に描くこともできる。子供のころの鮮やかな記憶に遡ることも、その前の、記憶とよぶのものはばかられる、断片的な感触や、匂いや、ささやき声の混沌とした思い出させ  
③ することもできる。心のうちの奥底まで探り、どんなつまらぬ考えも恥ずべき思いも、思いのたけも打ち明けることができる。しかも、社会で〈国語〉が広く流通すればするほど、人々は自分が話す〈母語〉そのものを、〈書き言葉〉としての〈国語〉を規範にして変化させていく。

かくして、〈国語〉は、あたかも自分の内なる魂から自然にほとばしり出る言葉のように思えてくるのである。〈国語〉とは、必然的に、〈自己表出〉の言葉となる。小説は、社会に対する個人の内面の優位を謳うものとして発展していったが、内面の優位とは、実は、〈国語〉で書くことの結果でしかない。

実際、理論的にも、〈母語〉とは、きわめて特権的な言葉である。

人は受胎されたときには何語も知らず、言葉はすべて後天的に学ぶものである。言葉はすべて、基本的には、自分にとって〈外の言葉〉なのである。だが、母親のお腹にいるときから学びはじめ〈母語〉だけは、学んでいったその過程が意識されない。それゆえ、言語の恣意性——記号と意味のあいだに、なんら必然性がないという、ふだん私たちが言葉を使うときには忘れている、というより、忘れざるをえない、言語の恣意性が意識されないのである。

日本人がフランス語を学ぶときは、「maman」という記号が「母親」を意味するのを意識的に学ばねばならず、その過程において、記号と意味の関係が恣意的であることを意識せざるをえない。ところが「母さん」という言葉が「母親」を指すのを意識的に学ぶことはなく、「母さん」という記号と「母親」という意味のあいだには、あたかも、必然性があるように思えるのである。ベネディクト・アンダーソンは、「生まれながらにラテン語を話す者はひじょうに少なく、ラテン語で夢を見た者はおそらくもつと少なかったろう」といっているが、実は、人は「生まれながらに」はどの言葉も話さない。ただ「生まれながらに」話していたように思われる言

葉と、そうではない言葉とがあるだけである。

小説の④期、イギリス人のダニエル・デフォーが『モール・フランダース』という女の一代記を書いたのは有名である。女主人公の名は、題と同じ、モール・フランダース。デフォーの序文によれば、モール・フランダースは「十二年にわたって娼婦、五度にわたって人妻（そのうち一度は自分の兄の）、十二年にわたって泥棒、八年にわたって流刑囚」だったというが、彼女自身、小説全体にわたってただの一度もその「罪深い」とでもいふべき波瀾万丈な人生を深く省みることはない。呆れるというより畏るべき内面の⑤である。それから二百年後、小説の⑥時、フランス人のマルセル・プーレストが『失われた時を求めて』という自伝風の小説を書いたのも有名である。こちらの主人公マルセルといえば、もういい歳をした男だというのに、昔のことばかりをめぐめそと思い返している。ことに思い返すのは、子供のころ、夜、お母さん(maman)が、おめかしをして客人を迎えるまえ、自分の寝室を訪れ、ちゃんとお休みのキスをしてくれるかどうか、それをベッドに横たわりながら、いかに不安のなかに待っていたかである。大人になったマルセルはそのときの不安を延々と語ってはばからない。

しかも、右の二つの小説を比べてもわかるが、時代を経るにつれ、あたかも詩のように、翻訳するのが困難な小説が書かれるようになっていった。一つの〈国語〉の〈図書館〉の規模が大きくなるにつれ、そのなかに入った〈読まれるべき言葉〉をそのまま引用したり、それを暗に仄めかしたり、パロディー化したりするうちに、同じ〈国語〉で書かれた〈読まれるべき言葉〉の連鎖をつくるようになるからである。小説は、一つの〈国語〉の〈図書館〉に入った言葉を、互いに呼応させはじめ、その〈国語〉独自の面白さを生かそうとはし始める。その地方の〈話し言葉〉をわざと生かすようにも、その〈国語〉のみで意味をなす言葉遊びを好んで入れるようになる。詩という形式において顕著であった翻訳不可能性を散文にももちこんでくるのである。プーレストと並び称されるジェームズ・ジョイスが書いた『ユリシーズ』が、たとえ西洋語へであろうと、不可能に近いほど翻訳困難なことはよく知られている。言葉というものは、いかに翻訳可能性をめぐそうと、閉じたシステムのなかで意味を⑦するものであるがゆえ、翻訳不可能性を必然的に内在するものである。〈国語〉は、その翻訳不可能性を、わざと追求したりするようにもなるのである。それは、ある言葉によってのみ現わすことができる、翻訳不可能な〈現実〉というものを見いだしていくことである。そしてそれは、翻訳不

可能な「真理」を見いだしていくということでもある。

実際、<sup>(b)</sup>「学問」と「文学」が分かれたことによつてよりはつきりと見えてきたのは、この世の「真理」には二つの種類があることにほかならない。読むという行為から考えると、それは、「テキストブック」を読めばすむ「真理」と、「テキスト」そのものを読まねばならない「真理」である。そして、「テキストブック」を読めばすむ「真理」を代表するのが「学問の真理」なら、「テキスト」そのものを読まねばならない「真理」を代表するのが、「文学の真理」である。

「学問の真理」では、すでに発見された「真理」の積み重ねが、次の「真理」に達するのを可能にする。たとえば、十六世紀半ばのコペルニクスの地動説は、さまざまな「真理」の積み重ねのあと、二十世紀前半にアインシュタインが相対性理論に達するのを可能にした。このような、「学問」を特徴づけるのは、のちにきた人が、過去に書かれた書物を、いちいち読む必要がないということである。「学問」は人類の叡智の積み重ねではあるが、究極的には、そこでは、真の意味での、「読まれるべき言葉」はない。なぜなら、そこで発見された「真理」は、その「真理」を記す言葉、そのものには依存していないからである。自然科学の場合には、そこで発見された「真理」は、究極的には、人間の存在にも依存していない。人間が存在しているようといなかうと、地球は太陽の周りを回り、光の速度は不変だからである。言葉そのものに依存していないがゆえに、「学問」において蓄積された「真理」は、最終的には、別の言葉に置き換えた「教科書」——「テキストブック」で学べるものなのである。「学問の真理」の最たるものは数式で埋められた「テキストブック」である。

それにひきかえ、「文学」で見いだしうる「真理」は「テキストブック」に取つて代えられることはない。そこにある「真理」は、その「真理」を記す言葉そのものに依存しており、その「真理」を知るためには、人は、誰もが、最終的には「テキスト」そのものに戻り、「テキスト」そのものを読まなくてはならないのである。

「文学」で達しうる「真理」には、毎回そこに戻つていかねばならない「読まれるべき言葉」がある。

そして、そのような「読まれるべき言葉」は、詩や、劇や、小説のような、狭い意味での「文学」にあるだけではない。アリストテレスの天動説はその後に「真理」ではないことは証明されたが、アリストテレスがいまだに読まれ続けているのは、かれの書いたも



のが〈テキストブック〉に置き換えられない部分を含むからである。アリストテレスがすべて〈テキストブック〉に置き換えられてしまったとき、それが〈テキスト〉としてもつ複雑性は単純化され、〈読まれるべき言葉〉があるのが見えてこない。〈テキスト〉に見いだされる〈真理〉は、文章の形とでもいふべきものから切り離せないものである。〈文学〉に見いだされる〈真理〉とは、同じようなことを言い表すのに、無限の可能性があるなから、この文章の形——この言い回し、この言葉の順番、この名詞、形容詞、動詞でなくては、この〈真理〉は存在しないという類いの〈真理〉である。

まさに、「真理は文体に宿る」のである。

かたや数式があり、かたや詩がある。〈書き言葉〉とは、〈テキストブック〉に完璧に置き換えられるものから、〈テキスト〉としてそこへ絶対戻っていかねばならないものまで、さまざまな形をとって読者の前に立ち現れる。それは、翻訳の可能性と翻訳の不可可能性のあいだの二律背反を指ししめし続ける。

(水村美苗、『日本語が亡びるとき 英語の世紀の中で』による。原文の一部を改変した。)





